
死なない能力ってちょっとチート過ぎませんか？

倦埜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死なない能力ってちょっとチート過ぎませんか？

【Nコード】

N1663V

【作者名】

倦埜

【あらすじ】

俺は死なない。いや、死ねない。死のうと思ってても死ねない。

1話 能力着装者 (skill fixer)

俺は三宮 駿。さんのみや しゅん

普通の高校生…のはずだったんだが、ひよんなことから毎晩毎晩ヤクザどもに狙われることになった。自分で言うのは何だが可哀想な男です。

「ウラァ！」

ほら、その影からヤクザが日本刀を持って俺を襲おうとしてますよ。

えっ？何でこんなに『冷静なんだ』って？そりゃ、俺が…

「サクツ！」

「痛え！」

腕が音を立てて、地面に落ちる。

「あーあこれは『痛え』じゃ済まされねえぞ。」

「何で…そんなに…冷静なんだ？」

「そりゃ、俺が…

死なない能力を持つてるからだろ。」

「し…死なない能力？」

「じゃあ試しに俺の胸を刺してみろよ。」

「な…。」

「まあいいや。お前『skill fixer』ってものを知ってるか？」

「なんだよ…それ…。」

「じゃあ『力』を使う必要はなさそうだな。」

「ち…『力』？」

「知らない…か…。じゃあな…。」

「え…どういことだよ…。」

「お前はこの言葉を知らない方がいい。」

「どういことだ？オイ！どこいくんだよ！」

「ただいま。」

「た…ただいま。」

「そこは『ただいま』じゃなくて『おかえり』だぞ。」

「お…おかえり。」

「そう。また一つ勉強になっただろ？」

「べ…勉強になった。」

この子は、自分では『ニ…ニア』と名乗るが、それが本名ではないことは俺も分かっている。

この子の本名は『skill fixer』。

『禁断の知識を用いてその知識に基づいて、特殊な能力を与える』という、口で説明しても、説明がつかなさそうな能力だ。

その能力によって俺も不死の体になった。

彼女自身もその能力を同じ能力を持つ者によって

『skill fixer』を、つけられたらしい。

彼女の目的は彼女自身に能力をつけたものを探し出すこと。

そして、能力をつけられて苦しんでる人やその能力を悪用する人の能力を打ち消すこと。

その目的の為に俺もニアを手伝っている。

何故かというと俺はこの子に命を救われたから…

それはある満月の夜の出来事だった

俺は塾の帰り道を自転車に乗って帰っていた。

その瞬間、轟音が鳴り響く。

その轟音は銃声だった。

「…銃声？」

俺はとつさにその銃声の音のもとへ向かった。

この行動は間違いだつたと気付いたのは後になってのことだつた。

そこにいたのは可憐な少女だつた。

俺より少し背の低く、整つた美貌と長い銀髪が特徴の女の子だつた。

見た目からして、俺とあまり歳は変わらないのだろう。

その少女の前にはごついヤクザ風の男：

…いや、ヤクザの男が銃口を少女の額に向けていた。

「早く能力をつけてくれないか？ 『skill fixer』。」

「あ…あなたにはつけられない。あ…あなたは殺気に満ちている。」

「じゃあ、死ぬ。」

男が引き金を握る指に力を入れる。

気がつくと、俺の体は無意識に動いていた。

俺は少女を突き飛ばし、銃口の正面に立っていた。

「ダァン！」

銃声が鳴り響き、男と少女に血の雨が降り注いだ。

2話 不死身 (immortal)

「い…いやあああああああ！」

暗闇に少女の声が鳴り響く。

「チツ…！関係無い奴まで殺しちまったか。こいつは処理が面倒だな。…ん？」

少女の体が強い光に包まれる。

「く…！これが…『skiller fixer』の力か！」

光がおさまると少女の腕は、紫の淀んだ光に包まれていた。

『冥府の王、プルトンよ。この者に朽ち果てること無き不死身の体を授けよ。』

そういつて少女は少年に手を触れた。

少年はうめき声をあげしばらくすると起きあがった。

額に残っていた弾痕もきれいに無くなっていた。

「う…。俺は…生きているのか？」

「な…。」

起きあがった俺を見てヤクザの男が驚愕の声をあげる。

しかし男は表情をすぐに変えた。

「そうだよ。その力で俺にも特殊な能力をつけてみてくれよ。」

男は歓喜の表情を浮かべていた。

男の言葉に少女が反応して口を開いた。

「そ…それは出来ない。」

「じゃあ、こいつに死んでもらうしかないな。」

銃口は俺の顔に向けられていた。

少女は無言で頷いた。

「ダン！」

再び銃声が鳴り響く。

「グアア！」

俺に弾丸が命中する。

あれ…何で俺…生きてるんだ？

ヤクザの男も俺と同じような反応をしていた。

「こ…この人につけた能力は『i m m o r t a l』。つ…つまり、不死身。」

「不死身…？俺は死なくなっただのか？」

「そ…そう。だ…だから、戦って。」

「戦うって、…このヤクザと？」

少女は無言で頷く。

まあ、普段の俺なら一目散いちまに逃げるところだが、俺は今、不死身なんだから？

じゃあ、あの拳銃チャカも怖くないや。

それに女の子を守ることが、男の役目だもんな。

「く…。じゃあ、そのガキ！この女がどうなってもいいのか？」

「クッ！」

今度は少女に銃口が向けられる。

「だ…大丈夫。そ…そこから動かないで。」

「…？」

俺は言われたとおり立ち止まる。

「死ね。」

ヤクザが引き金を握る指に力を入れようとした時、少女がこう言った。

「ま…待って。あ…あなたに能力を与える。」

「本当か？」

少女は頷いてこう言った。

『原初の神、タルタロスよ。この者に死を与えたまえ。』

「ドクン！」

大きな心音が男から2メートル位離れている俺にまで聞こえてくる。

そして男は地面に倒れて動かなくなった。

「そいつ…死んだのか？」

少女は無言で頷く。

「君は？何なんだ…？」

「わ…私は『skill fixer』。」

「『すぎるふいくしゃー』？それって何なんだ？」

「の…『能力着装者』。」

き…禁断の知識もちを用いて

その知識もとに基づいて、特殊な能力を与えるの。」

「は…はあ…。」

訳わけがわからん。

「その『スキル何とか』で俺は死なくなつたわけ？」

「し…死なないわけじゃない。じ…寿命が来れば死ぬ。」

「それで俺は不死身になつて何をすればいいんだ？」

「私の目的を手伝ってほしいの。」

「目的？」

「わ…私にこの能力をつけた人を探してこの能力をとってもらつてと。」

そ…そして、能力をつけられて苦しんでいる人の能力をとってあげること。」

「何で君は自分の能力をとりたがるんだ？」

「の…能力は呪いの一種なの。の…能力の一つ一つに違ったデメリットがあるの。」

「デメリット？じゃあ俺の能力のデメリットは何なんだ？」

「『immortal』の副作用は痛覚の倍増。」

「じゃあ君の能力のデメリットは？」

「の…能力を使うたび寿命が一年縮むの。」

「それって…俺につけた時も…。」

少女は頷いてこう続けた。

「そ…そう、今日で二年寿命が縮んだの。」

「二年… ってことはあのヤクザにも能力を？」
「そ… そう、あの男につけた能力は『death』。
こ… この能力をつけられたものは死ぬの。」
「だからあいつは死んだのか…。」
「そ… そう。ね… ねえ、私の目的に協力してくれるの？」
「まあ、やることもないしな。人助けつてものは大切だしな。」
何より、この子がかわいいし。
「い… いいの？ あ… ありがとう。」
「君、泊まる家とかある？」
「と… 特定の場所に泊まっていると、すぐに居場所がばれるから
ホテルや旅館を転々として^{てんてん}いるの。」
「じゃあうちに泊まってけよ。三食、飯つきだぜ。」
「い… いいの？」
「別にいいよ。おれ、不死身だし、夜中、君が襲われても助けるか
らな。」
「あ… ありがとう。」
「ところで君の名前は？」
「『ニ… ニニア』って呼んで。」
「わかった。ニニア。」

3話 時操者 (time puller) (前書き)

今回は少し長いです。

一日一話投稿したいと思います。

3話 時操者 (time puller)

俺はなんとなくテレビをつけた。ついたテレビにニュースが映し出される。

「今日未明、市で複数の人の首筋が刃物で切られるという事件が発生しました。」

「目撃者の話にによりますと、『急に首筋から血を噴き出して死んだ』

という証言が多く、不可解な殺人事件として警察が取り調べを行っていく方針の様です。」

「最近も物騒な事件が多いな……ん？どうした？ニア。」
ニアはテレビを真剣にのぞきこんでいる。

「こ…これ、能力者なら可能な犯罪。」
「どんな能力を使えばこんな犯罪が出来るんだ？」

「こ…こんなことをできる能力は一つだけしかない。
そ…それは、『time puller』。」

「『タイムプラー』…。それは、どんな能力なんだ？」
「と…時を操ることが出来る。だ…だが過去に戻すことは出来ない。

つ…つまり、速くするか、遅くするか、止めるか。」
「なるほど、だから誰も目撃することは出来なかったのか…。」

「そ…そして、『time puller』のデメリットは、
24時間以内に、止めた時間の倍の時間、時を速めなければなら
ない。

そして、遅くした時間と同じ時間、時を速めなければいけない。
それに逆らうと死ぬから。」

「なるほど。だからその能力で8時間以上時を止めさせればいい
んだな。」

「そ…そう、止める時間が8時間を超えた場合、速める時間が16
時間を超えるから、

8 + 16 = 24

となるので24時間を超えるから、『time puller』の死は決定する。」

「じゃあそいつが、9時間、時を止めて、

さらに、6時間、時を遅くしたらどうなるんだ？」

「そ…その場合は、

(9 × 2) + 6 = 24

となるのでその場合も、『time puller』の死は決定する。」

「よし、わかった。じゃあ、そいつの能力を消しに行くか。」

「わ…私がサポートする。」

俺は、事件の発生現場に向かった。

「ここが事件の発生現場か。」

俺はあたりを見回す。怪しい奴はいなさそうだ。

「もう、ここにはいないんじゃないのか？」

俺はニアに尋ねる。

するとニアは首を振ってこう言った。

「ま…まだ魔力の気配がある。こ…この近くにいる。」

「はいはい。ここはまだ危ないから、

カップルのお二人は近くの遊園地でも行ってなさい。」

一人の警官が声をかけてくる。

カップルという単語を聞いて、ニアの顔が赤くなる。

その瞬間、前にいた警官の首が地面に落ちた。

「な…。」

事件現場を取り囲んでいた警官達も次々に倒れていく。

「出たか！『time puller』！」

「あ…あの茶髪の男。」

ニニアが指差す先には茶髪の独特の雰囲気を持つ男がいた。身長は俺より高く、異様なほどゆっくり歩いている。

「い…今、『time puller』のデメリットが作動してる。」

「わかった。」

俺は走ってその男に近づき、一発、思い切り殴った。

「グッ！」

男は1mほど吹っ飛んだ。

「何だ？お前。いきなり殴ってきやがって、俺が誰だか分かってるのか？」

「わかってるよ。通り魔さん。」

「ほう。俺がやったと気付いたやつがいたか。だが、お前はもうすぐ死ぬぜ。」

「それはどうかな？」

「試してみるか？」

（『time puller』発動！）

男は時間を止めた。

剣を出して、青年の両腕を切り落とすと、剣をしまった。

（『time puller』解除！）

時間が再び動き出す。

俺の腕が地面に落ちる。

「痛いな…だが、それだけだ！」

ニニアに腕を拾ってもらい、元々付いていた所に押し当ててもらった。その腕はくっついてた。

何もなかったかのよう。

「お前：化け物か？」

「ただの人間さ。ちよっと前まではね。」

「じゃあ、死んだらどうなるかな？」

男は理解していなかった。

俺の能力が不死身だつてことを。
多分、男は傷を治すだけの能力だと思つたのだろう。
だから再び能力を発動させた。
それが無駄なことだとも気付かずに

(『time puller』発動！)

男は再び能力を発動させた。

今度は青年の体を横に真つ二つにした。

そして、心臓を3回ほど刺した。

そして剣をしまった。

(『time puller』解除！)

時間が再び動き出す。

俺の上半身が音をたてて落ちる。

「言つただろ。痛い。だがそれだけだつて！」

少年は自分の下半身をとつて、切れた断面につける。

すると傷は無くなっており、切れていたはずの所の服が破れているだけだつた。

「お前：何で生きてるんだ？」

「人の能力を勝手に判断するからあわてるんだよ。」

俺は剣を取り出す。すると男は怒鳴りあげた。

「ここにいる通行人全員が人質だ！だから俺を逃がせ！」

「人質なんてどこにいる？」

俺がそう言つてやると、男はあたりを見渡した。

歩いている人はどこにもいない。いるのは俺と男とニアだけだつた。

「あの女はお前の連れか？」

「ああ、そうだが。」

男は能力を発動させた。

(『time puller』発動！)

男は女に駆け寄つて、女の首筋に剣を構えた。

(『time puller』解除！)

時間が再び動き出す。

男は俺に向かってこう叫ぶ。

「この女がどうなってもいいんだろうな！」

「ばーか。」

と俺は男に言っただけ。

ニアは、男に手を触れてこうつぶやいた。

『leave』

男はそれに構わず、能力を発動させた。

(『time puller』発動！)

しかし時間は止まらない。

ニアは男の腕から抜け出し、俺は、男に剣をふるった。

剣は、男の腕に命中した。

しかし、切れはしなかった。

それは俺が峰打ちをしていたから。

男は痛みで剣を落とした。

そして、かがんでいる男に俺はこう言った。

「自首してこい。さもなければ、お前を殺す。」

「ひっ！」

男はあわてた様子で剣を拾い、それを持って、俺にこう言った。

「『これが凶器だ』って言って自首してきます。」

男は最寄りの交番に駆け出して行った。

「一件落着…か。」

「う…うん。」

4話 殺戮 (Massacre)

ある屋敷で男が一人、磁器のティーカップに紅茶を注ぎ、それを音を立てながら飲んでた。

男の年齢は、20歳前後とみれる。

男の身長は2m弱で鋭い目つきに細い眉、そして髪色は金の美しい男だった。

男は上下タキシード、と紳士の様な服装をしていた。

しかし、タキシードの中に着ている服は妙であった。

カッターシャツとネクタイが血のような赤い色をしていた。

不意に男の部屋のノックの音が鳴り響く。

「旦那様、お食事を持ってまいりました。」

「入りなさい。」

扉を開けて一礼をして入ってきたのは、メイド服を着た女だった。この屋敷の女中メイドだということが見てとれる。

女中は料理を運ぶワゴンを押していた。

その女中が料理を主あかじの机に並べていった。

「御苦労。」

主は、料理のほうに近づくと懐ふしに隠していた小刀こがたなを二本取り出した。

そして並べてあった料理に突き立てた。

「毒でも仕込みましたかな？」

「…。」

女中は何も言わなかった。

そして、ただ悔しそうな顔をして、部屋を後にした。

主は女中が持ってきた料理一つ一つに小刀を突き立てる。

そしてすべての料理に突き立て終わった後に、

小刀をナイフとフォークに持ち替えて、料理を口に運んだ。

男は毒の入った料理をただ美味そうに食っていた

「し…駿、こんな手紙が届いてた。」

その声に俺は起こされた。

声の発生源は二ニアだった。

「ん…なにになに…。」

俺は寝ぼけ眼まなこを擦りこすながら、手紙を読む。

拝啓、三宮駿様へ

今夜あなたを殺しに行きます?。

ヤクザより

「何だこれ…。」

「も…もう二通届いてる。」

拝啓、三宮駿様へ

あなたはヤクザに狙われてますよね。

学校が狙われると危険なので、あなたは退学です?。

校長より

「『あなたは退学です?。』じゃねえよ!何か、退学になっちゃっ

たよ！」

「さ…最後の一通。」

拝啓、三宮駿様へ

貴方あなたは『skill fixer』と一緒に住んでいるようですね。それ、譲ゆずってくれませんか？
返答次第ではどうなるかお分かりでしょう。

×公園で待っています。

「…フツ！上等だ。誰だか知らないが俺を殺せるものなら殺してみろよ。」

「い…行くの？」

「もちろんだ。返り討ちにしてやる。」

「な…何か、嫌な予感がする。」

「大丈夫だ。心配するな。」

俺は家を出て公園に向かった。

そこには男が一人いた。

男の年齢は、20歳前後とみれる。

男の身長は2m弱で鋭い目つきに細い眉、そして髪色は金の美しい男だった。

男は上下タキシード、と紳士の様な服装をしていた。

しかし、タキシードの中に着ている服は妙であった。

カッターシャツとネクタイが血のような赤い色をしていた。

「来てもらえると思っていました。ミスター三宮。」

「こんな悪趣味な手紙送りつけてきて何の用だ？」

「手紙にご用件は書いたつもりですが…。」

「お前はニニアをどうするつもりだ？」

「『ニニア』というのは『skiller fixer』のことですか？」

「どうするつもりだって聞いてんだ！」

「私の今の能力を外して不老不死の体にしてほしいんですよ。」

『それ』なら出来るでしょう。」

「ニニアを物みたいに言うな！」

「まあ、落ち着いて下さい、ミスター三宮。」

「チツ！」

「さて、本題に入りましょうか。私に『それ』を譲ってもらう事は出来るでしょうか？」

「答えは『NO』だ！」

「それは残念ですね…。じゃああなたを殺してでも奪いましょうかね。」

「やってみる！」

男は慣れた手付きで懐に隠していた小刀二本を取り出す。

そして一言、つぶや呟いた。

『Life』

そして、小刀を俺に突き刺した。

「そんな小刀二本で俺を殺せると思ってるのか？」

「ほう、命を『殺した』のに生きているとは。」

「ん？日本語になつてないぞ。」

「これであつてますよ。」

「あつそ！」

俺は剣を振る。

男はまた小さな声で呟く。

『movement power』

そして、男は小刀で俺の剣に軽く触れる。

俺の剣は動かなくなつた。

俺が驚いている間も、男は続けて攻撃を仕掛けてくる。

そして男はまた呟く。

『skill』

男は俺の腕を切った。

俺の腕からは鮮血が流れる。

「え…。」

俺は驚いていた。

これほど浅い傷なら『immortal』で治るはずだった。

だが、傷口からは、鮮血が流れ続けている。

「お前の能力は何だ？」

「『Massacre』ですよ。」

「『マサカー』？」

「…!!」

明らかにニニアが動揺している。

「何か知っているのか？」

「マ…『Massacre』は、最強と言われた能力。」

「どんな能力なんだ!？」

「あ…あの小刀で触れた物を『殺す』能力。」

こ…殺せるものは物質、命、エネルギー…その他なんでも。」

「どういうことだ？」

「つ…つまり、さっきの一撃で、駿の『immortal』の能力

が『殺された』。

だ…だから、駿は今、ただの人間と同じ。」

「つまり、今、俺はあいつに命を『殺される』と死ぬってことか？」

「そ…そう、駿が振った剣が止まったのも、剣の運動エネルギーが

『殺された』から。」

「名推理です。よくわかりましたね、『skill fixer』。

」

「…」

「まだあなたは分からないのですか？ミスター三宮。

わかりやすく説明してあげましょう。」

そういつて男は地面に落ちてある石を拾った。

「これは何の変哲へんてつもない石です。この石の硬さをこの小刀で『殺します』。」

そういつて、男は小刀で、石に軽く触れる。

「すると…。」

そういつて、俺に石を渡してくる。

石は俺が握った瞬間崩れた。

「何だこれ、豆腐みたいじゃねえか。」

「私はその石の硬さを『殺した』からですよ。」

「これが、『Massacre』の力…。」

「そうですよ。おっと、もうこんな時間か。朝食を食べに帰ります。」

「

「な…。」

「また来ますよ！ちなみに私の名前はヘルド・スミスです。」

男は、自家用へりに乗って、公園から飛び立った。

「傷が…治ってる？」

俺はさっきの傷があった場所を見てみた。

そこには傷は無くなっていた。

「た…多分あの男が殺した能力を元に戻したんだと思う。」

「そんなことが、できるのか？」

「の…能力を持った本人の意思があれば。」

「…。」

俺は、次あいつに会った時、ヘルドに勝てるのだろうか？

あいつは…強い。

俺は…

…弱い。

5話 反陽子 (anproton)

俺とニニアは、駅で昼食をとっていた。

「それで、この駅の近くの工場に能力を持った奴がいるって本当か？」

「う…うん。こ…この新聞の記事を見て。」

ニニアが見せてきたのは一枚の新聞だった。そこにはこう書かれていた。

世界初、無名の『和内研究所』が反陽子実験成功。

研究所が出来て、2ヶ月の和内研究所が実験を成功させたのは奇跡といえるだろう…」

「この記事が能力とどう関係あるんだ？」

「に…2ヶ月で反陽子の実験器具をまともに作るのは、まず不可能。」

「それで？」

「そ…それを可能にする能力が『anproton』。」

「『anproton』？」

「う…宇宙空間にある反陽子を好きな所に移動させる能力。」

「それで実験を成功させたってわけか。」

「そ…そう、それなら、加速器を使わなくてもただ頑丈な部屋であれば大丈夫だから。」

で…でも、デパトロンぐらい頑丈な装置を作るのにも結構な額がかかるけど…」

ニニアが訳の分からない専門用語を話し始めた。

これは、話が長くなりそうだな…話を変えるか…。

「じゃあ、その物理学の研究所に向かおうか。」
「は…反水素を生成したのかな…？でもあれは結構危険だし…」
「ニアが動く気はなさそうなので俺は引っ張って連れていくことにした。」

「ここが研究所か…。」

俺の前には結構大きな研究所が広がっていた。

「は…反陽子の研究施設にしては異様なぐらい狭いね。」

「これで狭い…か。」

多分、ドーム球場1個分くらいはあるだろう。

「何ですか？あなたたちは？危ないですよ！」

近くにいた白衣を着た人に止められた。

「あなたは新聞に載っていた…。」

「そうです。私が和内貴也かずうち たかやです。」

和内に握手を求めると和内も快く手てを握にぎってくれた。

「ところであなた方は何の用ですか？」

「能力…といえばわかるとは思いますか…。」

「なるほど…。」

和内が指をならした瞬間に研究所は大破した。

「この力のことでしょうか。」

「なぜ研究所を、爆破したんだ！？」

「この研究所は私の能力を試すためにだけに建てた物なんですよ。」

だからもう用済みです。私はこの能力でテロを起こす！」

「悪い事に使う気がなかったのなら、あなたの能力を取る気はなかつたんだがね！」

俺は元は研究所だった空き地の方に和内をぶっ飛ばした。

しかし和内は立ち上がり、手を振りかざした。

すると、俺の肩が爆発した。

「な…。」

「な…。」

「私が出しているのは反陽子。陽子とぶつかれば爆発が起きるんですよ。」

しかもどこにでも移動させることが出来ますよ。体の内部にもね！」

「ちよっとそれは反則じゃないか？」

「それがどうしたって言いますか？」

「クツ！」

「くらえ！」

和内が手を振りかざす。

すると、俺の周りに爆発が巻き起こる。

「ふははははは！」

和内の笑い声が空き地に響く。

しかしその笑い声もすぐに収まった。

「痛ってえなあ……。」

煙の中から声が聞こえる。

「何で生きてるんだ？反陽子をまともに食らっておいて……。」

「反陽子？そんなもん知ったこっちゃねえが、俺には効かねえな！」

俺は、和内に拳を振りかざす。

「待て！止まれ！待たないと地球を爆破する！」

「な……。」

俺は和内の言葉を疑った。

「お前にそんなことが出来るのか？」

「フ……。地球どころか、宇宙全体を爆破できるさ！」

「そ……それは不可能。う……宇宙にある反陽子を自分の好きなところに

移動させる能力だから、数に限りがある。」

ニニアが冷静に言う。

「だ……だが、地球一個ぐらいなら容易いこと。」

ニニアの言葉に嘘が混じっていないことは、ニニアの表情から見て

取れた。

俺は茫然と立っていることしかできなかつた。

地球を破壊する?...フッ...

「お前に出来るものならやってみろ!」

「じゃあやってやる!」

和内は地面に手を向けている。

その隣にはいつの間にか、ニニアがいた。

「た...確かに、マントルの中枢しゅうに反陽子を移動させれば破壊できる
ね。」

「ああ、私も君も死ぬんだよ!」

「そうはさせない。」

ニニアは、和内に手を触れてこう言った。

『leave』

「なぜ爆発しない!?!」

「さ...さあ?」

「く...。まあいい!私はテロを起こす!」

俺は新聞を読んでいた。

和内氏、各テレビ局に脅迫状を送り付けるが、
脅迫状に書かれていた爆発は実行されず、逮捕。

「自業自得だな。」

一言だけ感想を呟いて、俺は新聞を丸めて捨てた。

6話 塩酸使い (hydrochloric acid user)

「なあ、ニニア。」

「ど…どうしたの？」

「何で俺たちこんなところにいるんだ？」

「さ…さあ？」

今、俺たちは瓦礫がれきの山に閉じ込められている。

さっき、あいつが何かしていたけどそれは関係あるのか？

まあ、あいつに見つかる危険性があるから、ここから動くのはやめておいた方が良かったろう。

「死んだか。呆気あっけなかつたな。」

今、あいつに隙ができた。

反撃を仕掛けるなら今しかない！

前に踏み出そうとした時、俺は足を止めた。

「見たたのか？ヘルド。」

「見つかってしまいましたか。フォワード卿きょう。」

あ…あいつは…、ヘルド・スミス！？

俺は、町外れの道を、ニニアを自転車の後ろに乗せてめいっばい自転車をこいでいた。

「ニニア、魔力の気配ってのはどこからするんだ？」

「そ…そこを右に曲がった所。」

「わかった。」

俺は、ニニアの言ったとおり右に曲がった。

そこは、ヤクザの事務所だった。

「こ…こ…」

「え…。」

「話を見てもらえばわかると思うが、俺、ヤクザに狙われています。

「ちよつと待った。」

「？」

「…まあいいか。俺、死なないんだし。」

そんなことを言っていると、ヤクザが二人、事務所から出てきた。

「それでよ、ヤクの話はどうなったんだ…。」

「ハ、ハロー。」

「…。」

「…。」

「逃がすな！あいつが三宮って奴だ！」

「じゃあ『skiller fixer』も一緒か！？」

「うわあああああ！」

俺は二ニアの手を引いて逃げた。

そして建物の影に隠れた。

「どこ行った！ゴラア！」

「何とか巻いたか…。本当にあの中に能力者がいるのか？」

「う…うん。」

「となるとまずいな…ヤクザ側が能力を手に入れたか…。」

「た…確かにまずい。し…駿を倒せるほどの能力を手に入れたかもしれない。」

「とにかく、あの中に入って、能力を外すしかないよな。」

排気口、何とか事務所に入り込んだわけだが…何か…変な臭いがする。

これは…何の臭いだ？

「オイ！お前も侵入者を探すのを手伝えよ！」

下の部屋から声が聞こえた。

「侵入者の居場所は知っているが、お前俺に何で敬語を使わねえんだ!?!」

下から怒鳴り声が聞こえた。

「ジユウウウ」

「グオオオオオオオオ!」

何かが焼けたような音と悲鳴が聞こえた。

「なあ、侵入者さん。」

俺がいた所の板が、腐敗した板のように崩れ落ちる。

「あんたが、侵入者なんだろ?」

「ああ。」

「じゃあその横にいるのは、『skill fixer』だよな。」

こいつ、ヤクザと違う目をしている。

ヤクザは、人殺しになれている目だが、こいつは、人殺しを楽しんでいる目だ…。

「さて…はじめようじゃないか…真剣な殺し合いをよお!」

男の周りに液体が渦巻く。

その液体が振れた地面が音を立てて溶ける。

「あ…あれは…『hydrochloric acid user』

、つまり、『塩酸使い』。」

「塩酸!?!チートじゃねえか!」

「し…駿なら、勝てない相手じゃない。」

「…わかった…その言葉、信じるぜ!」

その瞬間、床が崩れ落ちた。

「なあ、二ニア。」

「ど…どうしたの?」

「何で俺たちこんなところにいるんだ？」

「さ…さあ？」

今、俺たちは瓦礫がれきの山に閉じ込められている。

さっき、あいつが何かしていたけどそれは関係あるのか？

まあ、あいつに見つかる危険性があるから、ここから動くのはやめておいた方が良さだろう。

「死んだか。呆気あっけなかったな。」

今、あいつに隙ができた。

反撃を仕掛けるなら今しかない！

前に踏み出そうとした時、俺は足を止めた。

「見てたのか？ヘルド。」

「見つかってしまいましたか。フォワードきょつ卿。」

あ…あいつは…、ヘルド・スミス！？

「まあ、あんなことで死ぬ人じゃないですよ。ミスター三宮は。」

「まだ、生きてるとでもいいいたいのか？ヘルド。」

「ほら、後ろを見てくださいよ。」

「後ろ？」

俺は、フォワードと呼ばれた奴を殴った。

「グッ！まだ生きてやがったか。」

「あいにく、死なないんでな！」

「じゃあ、眼球に塩酸をぶっかけてやるよ！」

俺の目に液体がかかった。

「クッ…」

「どうだ！」

「クックックックックックッ…そんなもん、効くか！」

「なっ…！？」

「くらえ！」

俺はもう一度、フォワードを殴った。

「ガハツ！お…お前なぜ失明してないんだ…。」

「失明はさつきした…もう治ったがな。」

「ウツ…仕方ない。ここは一旦引くか…。また会おうぜ、三宮。」
「逃がすか…！」

フォワードが窓を開けると、そこにはヘリが用意してあった。

そのヘリは前にヘルドが乗っていたヘリと同じものだった。

「俺の名前はケリシス・フォワード。よく覚えておけ。」

「じゃあ失礼しました、ミスター三宮。」

ヘルドとフォワードはヘリに乗り込んですぐに見えなくなった。

「クソッ！」

「ヘルド、あいつ、強いな。」

「ミスター三宮は強いですよ…まあ強いだけじゃないですけどね。」

「強いだけじゃない？」

「あの人には『double skill』の素質がある。」

「『ダブルスキル』か…。なるほどな…。」

番外編 夢喰い (dream eater) (前書き)

風邪を引いていて、更新が一日遅れました。
明日からは大丈夫…だと思います。

番外編 夢喰い (dream eater)

「ここは…?どこだ…?」

俺は、真つ白で、どこまでも奥行きが広がっている空間にいた。その真ん中には女の人が一人居座って何かをブツブツ唱えていた。俺はそれに惹かれたように、その人に声をかけた。

「あなたは…誰ですか?」

「什? does? do。」

「え?」

「不理会…。」

「中国語…か?」

「yes.??とEnglish and日本語。」

「中国語と…英語と…日本語?」

「是。」

「『是』は…確か…『はい。』という意味だったよな。」

「不理会部分make up for知っている単語で。」

「『分からない所を』補う『知っている単語で。』…か?」

「そう。?quite familiarなぜ?」

「『君』精通している『なぜ?』か…。」

ちよつとそんな話し方をする知り合いがいてね。」

「把中文?成日文、??」

「『中国語を和訳して話した方がいい?』か…。うん、そうしてく
れると嬉しい。」

「カタコトだが、日本語で話すヨ。」

「ここはどこか知っているか?」

「ここは夢、あなたの夢サ。」

「俺の…夢?」

「ソウ。そして私、能力者、『dream eater』。」

「『ドリームイーター』…つまり夢喰いか。」

「そう。」

「君は俺の夢を食べてどうしようって言うんだ？」

「カロリーにするだけ。健康や寿命などには関係ない。」

「なるほどな…悪い能力じゃないのか。」

「そう。だからもう少し食べさせていテ。」

「そうはいかないな。」

「え？」

「だって、君は死んでいる、そうだろ？結幹^{ゆみき}？」

「何であたしの名前を知っているノ？死んでル？私はこうやって生きてるけど。」

「あんたは俺の幼馴染だった。だから名前を知っている。あの時の事故のことも。」

「事故のこと…？」

「結幹、お前は、交通事故で死んだ。」

「そんなわけがない。私は生きてイル。」

「じゃあ何で俺のことまで忘れたんだ？結幹。」

「あなたの…名前八…？」

「三宮 駿。」

「駿……………アアアアアアアア！」

「思い出したかい？」

「私は死んだ…私は…わた…わわわわわ…。」

「ツクハア。」

その時、俺は目を覚ました。

「夢…だったのか？」

俺は写真立てを見た。

そこには、俺と手を繋いだ幼馴染が写っていた。

「たとえば、今のことが真実であろうが、嘘であろうかというのはど

「うちでもいい。俺は、あいつを忘れない。」

そうして俺は再び眠りについた。

7話 双能力 (double skill)

「俺は…死ぬ…のか…?」

俺の体には激しい激痛が走っていた。

死なないはずの俺の体が苦悶くもんに耐えられなくなっているのかもしれない。

目の前ではニニアがいつも通り無表情な顔をしている。

だがニニアの瞳は違った。

瞳の奥がどことなく忙せわしなく震えていた。

不意にニニアが口を開く。

「だ…大丈夫。あ…あなたなら死ぬことはない。」

確かにそうかもしれない。

しかし、『immortal』のデメリットは痛みの倍増。

俺からすると四肢ししを引きちぎられるような激痛が走る。

「ウ…ぐ…う…」

痛みで声さえ出なくなっていた。

不意に俺の体が何かに反応した。

体中の骨こしが軋きしみ、爪もはがれて、全身に今までにない激痛が走る。

「グアアアアアア！」

断末魔だんまつまの様な絶叫ぜつきょうが、室内に響いた。

俺はニニアと昼食を食べていた。

「『ダブルスキル』?それは何なんだ?」

「だ…『ダブルスキル』というのは、そのままの意味。

ふ…二つの力を持つことが出来る能力。

で…でも、この能力は『skill fixer』を持ってしても、付けることは不可能。」

「じゃあどうやって…。」

「か…体の強さ、心の強さ、そして運。」

そ…それらのすべての条件が整っている人にもみ許された能力。」

「それってつまり…。」

「そ…そう、駿、あなたのこと。」

体の強さはあなたは足りていないけど、『immortal』で補^{おぎな}える。」

「俺にそんな力があるのか？」

「す…少なくとも『今は』無い。」

そ…そのうち、勝手に『double skill』が使えるようになる、おそらくは…20〜30年後ぐらい。」

「そんなに遅いのか？」

「そ…そう。でも私はあなたに、その能力を發揮させるきっかけを与えることが出来る。」

「じゃあやってくれよ。」

「で…でも、これには相当なリスクが伴^{ともな}う。」

「リスク…？」

「い…今までにない激痛が体中を廻^{めぐ}る。し…死ぬより辛い思いをする。」

「死ぬより辛い思い…か。」

「や…やるか否かはあなたが決めて。」

「そりゃ…やるよ。」

「わ…わかった。で…でもつらくなったら私に言って。楽に死なせてあげることもできるから。」

「ああ。」

「俺は…死ぬ…のか…？」
俺の体には激しい激痛が走っていた。
死なないはずの俺の体が苦悶くもんに耐えられなくなっているのかもしれない。

目の前ではニニアがいつも通り無表情な顔をしている。
だがニニアの瞳は違った。
瞳の奥がどことなく忙せわしなく震えていた。
不意にニニアが口を開く。

「だ…大丈夫。あ…あなたなら死ぬことはない。」
確かにそうかもしれない。

しかし、『immortal』のデメリットは痛みの倍増。
俺からすると四肢しじを引きちぎられるような激痛が走る。

「ウ…ぐ…う…」
痛みで声さえ出なくなっていた。

不意に俺の体が何かに反応した。

体中の骨が軋きしみ、爪もはがれて、全身に今までにない激痛が走る。
「グアアアアアア！」

断末魔だんまつまの様な絶叫ぜつきょうが、室内に響いた。

「し…駿？し…駿？し…死んじやだ。し…死なないで…。」
それはニニアという名の少女が初めて見せた涙だった。

「へ…『heaven』で、一思いに殺した方が、駿も楽なはず…。」

ニニアの体が白光に包まれた。

『神よ。そして天よ。この者に安らぎに死を与え…。』

「ニニア。その必要は…ない…クッ！」

「し…駿！」

ニニアは俺に抱きついてきた。

「やめろって。まだ、昼過ぎだぞ。」

「じ…じゃあ、夜ならやってもいいの？」

「夜はもっとだめだ。」

「し…駿のケチ。」

俺は、新たな能力、『double skill』を手に入れた。

8話 武具化 (Weaponize) (前書き)

最近、能力のアイデアが無くなってきました。

アイデアをくれると嬉しいです…いや…アイデアをください！

8話 武器化 (Weaponize)

午後二時を回った街には人の気配はしなかった。

例えこの時間と言えど、外に人が一人も出ていないのはおかしい。いや、人が外に出ていないわけではない。

町中の人がすべて何者かに殺されていた。

そんな町の中に、一際、目立っている建物があった。その建物は燃えていた。

その建物の中に、2つの人影があった。

一人は少女、整った美貌と長い銀髪が特徴の女の子だった。年齢は、10歳を超えて間もない。

もう一人は男、纏った黒いコートは地面についていて、歩くたびにそれを引きずっていた。コートと同じ色の帽子をかぶっており、顔立ちは、帽子に隠れて、よく見えない。

「君がこの街の最後の生き残りだ。」

「な…何をするの?」

少女は、身構えて、男の出方を窺っている。

「生き残った褒美だ。能力をやる。」

「の…能力?」

「そうだな…何をつけようか…そうだな…よし。」

男は手を地面と水平にあげて、その手を少女に向けた。

「な…何?」

『原初の神、アイテールよ。この者に我と同じ宿命、そして、我と同じ能力を与えよ。』

「い…いやあああああ！」

「…ニア！…ニア！」

「…し…駿？」

「どうしたんだ？叫んでたけど、嫌な夢でも見たのか？」

「な…何でもないの。ち…ちよつと隣に居させて。」

ニアは、俺の服の裾すそを握った。

「わかった。そばにいる。そばにいるから、2つ質問していいか？」

「な…なに？」

「昨日、『double skill』を手に入れただろ？」

「つ…つまり、駿が言いたいのはどんな能力が良いかということでしょう。」

「ああ、それと、『massacre』などの、他人がつけている能力をつけることができるか？」

「ひ…一つ目の質問は、答えが少し長くなるから、まず二つ目の質問。」

ふ…二つ目の質問の答えは不可能。それはルールとして決まっている。

「なるほどな。」

「そ…そして一つ目の質問の答えは、『weaponize』、つまり、『武具化』なんてどう？」

「ウエポニーズ？」

「そ…そう。ウ…『weaponize』は生物以外の物の形を變形させることができる。」

「なるほどな。つまり壁などの一部を剣などに形を変えて、

武器を作るってことか。でも何で俺にこの能力を勧めたんだ？」

「ふ…二つの理由がある。ひ…一つは攻撃手段を作ること。し…駿の能力は、攻撃手段がないから、攻撃手段を作るの。」
「なるほど…二つ目の理由は？」

「ふ…二つ目の理由は『Massacre』などの対抗策。ウ…『weaponize』で作ったものを身代りにして『Massacre』の能力を駿の体に届かなくする。」

「確かに、『Massacre』は触れないと、殺すことができないからな。」

「じ…じゃあ、今すぐにでも、この能力を付けようか。」

「ニニア、お前の寿命は大丈夫なのか？」

「だ…大丈夫。の…能力を誰かに付けるのには寿命が一年減るけど、誰かの能力を取り外すときに寿命が1年増えるから。」

「そうだったのか。」

「じ…じゃあ、やるよ。」

『戦争の神、アレスよ。この者に、武器を創造する能力を与えよ。』

俺とニニアを光が包み込む。

「これで…俺に能力はついたのか？」

俺が言った後にニニアはペンを取った。

「例えば、これに触って、『sword』と言うと剣の形になる。」
「えっと…『ソード』？」

俺が言い終わった後、ペンは眩い光まはを放って、形を変えた。

「ちっこい剣だな。」

ペンの大きさの剣になっていた。

「ほ…他にも、『shield』（盾）『lance』（槍）『gun』（銃）など。」

そ…そして、特殊な武器にも出来る。

ス…『stun gun』（スタンガン）『chain saw』（チェーンソー）なども。」

「チェーンソーって…。」

「ぶ…武器になるものなら何でも。」

「なかなか強い能力だな。」

俺がそう言った瞬間、窓が割れた。

「なっ!?!」

「じ…銃弾?」

ニニアは落ちていた葉莢はせを拾った。

その瞬間、ニニアと葉莢の輪郭りんかくがぶれた。

時間が経つにすれその影は薄くなり、10秒ほどで見えなくなった。

「ニニア!?!」

「釣れたぜ。オイ。」

ニニアは、網の中に入れられていた。

「あ…あなた誰?」

「そつだな…『敵』とだけ言っておこうか。オイ。」

「て…敵?も…もしかして『デイダリシア』のグループ!?!」

「『デイダリシア』?何のことだ?オイ。」

「じ…じゃあ、『ヘルド・スミス』のグループ?」

「ほっ…その名前を知ってるのか。オイ。」

「ニニア!?!」

「あれが三宮駿か。オイ。」

「駿！」

「じゃあな、三宮駿とやらよ！オイ！」

その瞬間、ニニアと男の輪郭りんかくがぶれた。

時間が経つにすれその影は薄くなり、10秒ほどで見えなくなった。

俺はそれを茫然と見ていることしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1663v/>

死なない能力ってちょっとチート過ぎませんか？

2011年8月15日13時36分発行